多文化共生教育コンソーシアム
―概要と連携授業の紹介―

国際学部　出　羽　　尚

はじめに

本稿では、2021年３月17日に協定が交わされた多文化共生教育コンソーシアムの概要と、その主要事業である連携授業について紹介する。

多文化共生教育コンソーシアム概要

多文化共生教育コンソーシアムは、弘前大学、宇都宮大学、長崎大学、東京外国語大学の四大学によって設立されたコンソーシアムである。それぞれに多文化共生教育に取り組んできたこの四大学が、昨今の社会において益々求められる、多文化共生社会の実現に不可欠な人材育成の必要性を鑑み、大学間ネットワークの構築を目的として今回のコンソーシアム設立に至った。各大学の教育研究資源を共有することによって、多文化共生教育の実現に向けた一歩を、大学発で進めていこうとする取り組みである（コンソーシアム概要のイメージは資料を参照のこと）。

多文化共生教育コンソーシアムの協定書調印式は、オンラインで2021年３月17日に開催された。弘前大学福田眞作学長、宇都宮大学石田朋靖学長（代理出席：佐々木一隆国際学部長）、長崎大学河野茂学長、東京外国語大学林佳世子学長の出席のもと、協定書への署名が交わされた。この調印式にあわせて提示された本コンソーシアムの設立の趣意は下記の通りである。

> グローバル化によって地球規模での人の流動性が加速するなか、世界は、いまだかつてないほどに緊密に結び付けられ、全世界で多言語・多文化化が進んでいる。これに伴い、地球上の至る所で幸福な出合いとともに、様々な衝突や摩擦も生まれている。今や異なる言語、習慣、文化を持つ人びとが対等な関係を築き、平和に暮らすことのできる多文化共生社会の実現は、地球全体で目指すべき目標ともいえる。
>
> 我が国においても、日本人人口動態の変化や、グローバル化による外国人住民の増加に伴い、国際結婚や外国にルーツを持つ子どもの出生が確実に増えている。そのため、地域社会において多言語・多文化対応ができる人材、および多様なルーツをもつ住民に寄り添って問題解決ができる人材の育成は急務となっている。
>
> こうした状況の中で、国内の多文化共生に取り組む大学等が、全国的なネットワークを形成し、各大学等の特色を活かしながら相互に連携・補完し、我が国の多文化共生社会の実現に資する人材を育成することは、知の拠点たる大学の重要なミッションといえる。また、参画大学等の間でICTの積極的な活用を推し進め、日本全国、時には海外までを学びのフィールドとする多文化共生教育のオンラインプラットフォームを構築することは、 ポストコロナ時代における新たな教育連携の可能性を開くものである。
>
> 以上を踏まえ、ここに多文化共生教育コンソーシアムを設立する。

こうした理念のもと、本コンソーシアムはその主たる事業である連携授業を2021年度、並び

に2022年度に実施してきた。新型コロナウイルスの流行によって、大学の授業において図らずもオンライン技術の活用が急速に広まったことを前提にして、連携授業を通してコンソーシアムの基盤を形作っているというのが、協定調印から２年を経過する現在の状況であると言って良い。

関連企画

本コンソーシアムの連携授業の開始に先立って、令和３年９月16日に静岡大学情報学部を主催者としてオンラインで開催された、第26回国立大学新構想学部教育・研究フォーラムのシンポジウムにて、本授業の概要が発表された。

「オンライン化により見えた大学授業の課題と将来像」をテーマとしたこのシンポジウムでは、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行によって図らずも進んだ教育現場のオンライン化に関する様々な課題が共有された。一方で、情報技術を活用がもたらした授業参加の機会均等化、学習の質や教育的効果の向上といった多くのプラスの側面があることが分かってきたことにより、オンラインによる授業の方が良いのか、対面の授業の方が良いのか、といった単純な議論ではなく、教育の根幹に関わる諸要素、すなわち、教育目標や学習内容、また、学修者の特性といった様々な教育実践の要素に関する本質的な議論が改めて求められることを確認する場でもあった。

上記の趣旨によるシンポジウムにおいて、本コンソーシアムの連携授業は、４大学がオンラインで連携するという新たな取り組みとして紹介された。本シンポジウムの登壇者と報告テーマは以下の通り。

―京都大学総合人間学部　宮下英明教授
「キャンパスで学ぶ意義」
―群馬大学社会情報学部　岩井淳教授
「オンライン時代の「百年の計」を考える」
―宇都宮大学国際学部　出羽尚准教授
「多文化共生教育コンソーシアム連携授業の計画について」
―静岡大学情報学部　大島純教授
「ハイブリッド学習環境における学習分析：PBL演習から見えてきた知見」

連携授業

連携授業は本コンソーシアムの核となる事業である。四大学共同で授業を実施することによって、各大学の学生は、自分が所属する以外の大学が有する研究教育資源を共有することができ、多文化共生社会の実現に向けた学びが、より一層深化したものとなることが期待される。

連携授業は、これまで2021年度と2022年度の２度、いずれも後期の水曜12時40分からコマとして、ZOOMのミーティングを使用したオンライン形式で開講された。この２回とも基本的な授業の枠組みは同様で、各大学が２コマから３コマの授業を各論として提供する。所属や専門の異なる教員による授業は、多岐に渡る領域と方法論によって、多文化共生教育の多様な課題とアプローチの可能性を示すものである。受講する学生の授業コメントからは、異なる大学の教員の授業を受講できる点に連携授業の魅力を感じている様子が受け取れる。

この各論に加えて、四大学の学生が多文化共生教育の課題に対する問題意識や疑問、考えを共有するための授業である「交流授業」が学期半ばと学期終わりに１回ずつ、合計２回設定されている。ZOOMのブレイクアウトルーム機能を用いて、異なる大学に所属する学生同士がグループに分かれ、それまでに受講した授業を振り返りながら、それぞれの考えを共有する。東北から九州と地理的にも離れた四大学に所属する学生が、オンラインのツールを通じて交流できることが連携授業の大きな売りになってお

り、受講する学生の声からも、交流授業での刺激が大きな意味を持っていることがうかがえる。

各論と交流授業からなる連携授業を、4大学はそれぞれのカリキュラムにあわせて、科目名や単位認定方法、受講対象学年などを独自に設定して運用している。また、学事暦がそれぞれの大学で異なるため、連携授業は全ての大学の授業実施日が重なる日に実施しており、全体で13コマが連携授業として実施され、単位認定のために必要な残りコマ分は、それぞれの大学が独自にコマ数を授業として設定し対応している。

宇都宮大学国際学部では、本コンソーシアムの連携授業を国際学部の専門科目の一つとして位置付け、2021年度は「グローバル化と外国人児童生徒教育」として、2022年度は「多文化公共圏研究演習」として開講、半期2単位の科目とした。登録上、宇都宮大学からは2021年度は40名、2022年度は73名の学生が連携授業に参加している。

それぞれの年度の授業計画は以下の通りである。

2021年度授業計画

「グローバル化と外国人児童生徒教育」

第 1 回　オリエンテーション（前半：4大学合同で実施、後半：宇大で実施）
第 2 回　宇都宮大学担当授業：田巻松雄「多様な学びの場を地域で支える―夜間中学、定時制、大学」
第 3 回　宇都宮大学担当授業：立花有希「ドイツにおける移民の子どもと学校教育」
第 4 回　長崎大学担当授業：門司和彦「熱帯での環境と健康を探究する」
第 5 回　長崎大学担当授業：細田尚美「移民の視点から世界を捉え直す」
第 6 回　交流型授業①
第 7 回　弘前大学担当授業：澤田真一「ニュージーランドにおけるマオリとパケハ：文化的融合と環境政策」
第 8 回　弘前大学担当授業：白石壮一郎「文化人類学の立場から見た多文化共生」
第 9 回　弘前大学担当授業:山下梓「LGBTIQAの人たちと人権の視点からみた暮らし」
第 10 回　東京外国語大学担当授業:阿部新「外国人への日本語教育」
第 11 回　東京外国語大学担当授業: 内藤稔「コミュニティ通訳の世界」
第 12 回　東京外国語大学担当授業：小島祥美「外国につながる子どもと教育」
第 13 回　交流型授業②
第 14 回　総括①（宇大で実施）：田巻松雄
第 15 回　総括②（宇大で実施）：田巻松雄

2022年度授業計画

「多文化公共圏研究演習」

第 1 回　オリエンテーション（前半：4大学合同で実施、後半：宇大で実施）
第 2 回　東京外国語大学担当授業:阿部新「外国人への日本語教育」
第 3 回　東京外国語大学担当授業:内藤稔「コミュニティ通訳の世界」
第 4 回　弘前大学担当授業:澤田真一「ニュージーランドにおけるマオリとパケハ:文化的融合と環境政策」
第 5 回　弘前大学担当授業：白石壮一郎「文化人類学の立場から見た多文化共共生
第 6 回　弘前大学担当授業:山下梓「LGBTIQAの人たちと人権の視点からみた暮らし」
第 7 回　交流授業①
第 8 回　長崎大学担当授業：門司和彦「熱帯

途上国で環境と健康を探究する」

第 9 回　長崎大学担当授業：細田尚美「移民の視点から世界を捉え直す」

第 10 回　宇都宮大学担当授業：槙野佳奈子「19世紀ヨーロッパにおける帝国主義への反省と現代に残された課題」

第 11 回　宇都宮大学担当授業：阪本公美子「アフリカで考える多文化共生」

第 12 回　中間総括（宇大で実施）：佐々木一隆（これまでの講義と交流授業をふりかえって、今後に向けて、ことばと文化についてのミニ講義、最終レポートについて）

第 13 回　宇都宮大学担当授業：出羽尚「イメージの理解・多文化共生教育への応用可能性」

第 14 回　交流授業②

第 15 回　最終総括（宇大で実施）：佐々木一隆（すべての講義と交流授業をふりかえって）

おわりに

以上、多文化共生教育コンソーシアムの概要と、連携授業の内容について紹介してきた。協定の締結から 2 年を経て、連携授業を通して築いてきた大学間のネットワークによって、多文化共生教育の進展と、また多文化共生社会実現に向けての人材育成とに繋がっていくことが期待される。

資料：多文化共生教育コンソーシアム構想概要（2021年3月17日協定書調印式での配布資料）